

人麻呂「献呈挽歌」の話者と抒情

——「明日香皇女挽歌」との比較を中心に——

原 田 陽 子

柿本朝臣人麻呂献呈泊瀬部皇女忍壁皇子歌一首并短歌

飛鳥とぶとり 明日香乃河之あすかのかはの 上瀬尔かみつせに 生玉藻者おふるたまは 下瀬尔しもつせに 流触経ながれふらばふ

玉藻成たまもなす 彼依此依かよりかくより 靡相之なびかひし 孀乃命乃つまのみことの 多田名附た た な づ く 柔膚尚乎にきはだすらを

剣刀つるぎたち 於身副不寝者みにそへね ねば 烏玉乃うばたまの 夜床毛荒良無よじこもあるらむ 一云阿礼奈牟あれなむ

所虚故そこゆゑに 名具鯨兼天なぐさめかねて 気田敷藻けだしくも 相屋常念而あふやとおもひて 一云公毛相哉登きもあふやと

玉垂乃たまだれの 越能大野之をちのおほのの 旦露尔あさつゆに 玉蒙者泥打たまもはひづち 夕霧尔ゆふぎり 衣者沾而ころもはぬれて

草枕くさまくら 旅宿鴨為留たびねかもする 不相君故あはぬきみゆゑ (巻二 一九四)

反歌一首

敷妙乃しきたへの 袖交之君そでかへしきみ 玉垂之たまだれの 越野過去をちのすぎゆく 亦毛将相八方またもあはめやも 一云乎を

知野尔過奴ちのにすぎぬ (同 一九五)

右或本曰 葬河島皇子越智野之時 献呈泊瀬部皇女歌也

日本紀云 朱鳥五年辛卯秋九月己巳朔丁丑淨大參皇子

河島薨

朱鳥五(六九一)年、河島皇子は三五歳で死去した。右の二首は、それに際して柿本人麻呂が河島の妻と目される泊瀬部皇女とその兄弟忍壁皇子に献じたものである。こうした作歌事情から、当該歌は「献呈挽歌」と呼ばれている。

この作品の前後には同じく人麻呂作の草壁、明日香、高市三皇子皇女の殯宮挽歌が排列されており、これらは万葉宮廷挽歌の典型といわれている。これらの宮廷挽歌に関しては本稿では、歌い手が死者の配偶者などの当事者以外の、第三者であるという特徴に改めて着目する。つまり、死者の配偶者や近親者など身近な者から発せられる嘆きが、記紀歌謡以来の挽歌の基本形であり、そうした傾向が万葉時代にも受け継がれたという、^{注1}一般的な挽歌との差異を考えたいのである。

集内における一般的な挽歌では、「作中主体↓死者」という抒情がある意味、単純な形で可能である。逆に、上述の特徴を有する

宮廷挽歌の場合、挽歌的抒情は一筋縄ではゆかず、作品の抒情は自ずから或る種の無理を孕むことが予想される。特に、遺族に献呈されたという、当該歌の歌い手はどのようにして自らの挽歌的抒情を果たしているのだろうか。本稿では個々の叙述を辿ってゆくことにより、その抒情の特徴を明らかにしたいと考える。

一

献呈挽歌に関しては解釈上の定解をいまだみない語句が幾つかあり、研究史の多くの部分がその検討によって占められている。

それは、前段「婦」が死者河島を指すのか妃泊瀬部を指すのかという問題に始まり、「夜床」の意味内容にまで相関わりながら、長歌全体の理解に大きな違いをもたらす部分である。先行研究の適切な整理分類は稲岡耕二氏^{注2}によって既に行なわれているので、以下に挙げてみることにする。

※本文「婦の命のたなづく柔肌すらを剣刀身に添へ寝ねばぬばたまの夜床も荒るらむ」において、傍線を付した部分が分類の基準となっている。

a 婦(河島)の命の柔肌を(泊瀬部が)身に添えて寝ないの
で泊瀬部の閨房も荒涼としていることであらう。

b 婦(泊瀬部)の命の柔肌を(河島が)身に添えて寝ないの

で河島の墓中(泊瀬部の閨房、とする説もある)も荒涼と
していることであらう。

c 婦(河島)の命が、泊瀬部の柔肌を身に添えて寝ないの
で、泊瀬部の閨房も荒涼としていることであらう。

これらのうち、『代匠記』に遡るa説が従来主流であったが、柔肌を男性のものとすることや、藻を描写する序の続きに男性河島がうたわれることが不自然であるという理由から『全註釈』や『私記』がb説を唱えた。

まず、集内における「藻」の用例を調べてみたい。総使用数四十例以上のうち、相聞的場面を表わし、かつ男女の区分の明瞭なものは人麻呂「石見相聞歌」の三例である。

…浪のむたか寄りかく寄る玉藻なす寄り寝し妹を露霜の置きて
し来れば…
(巻二 一三一)

…荒磯にぞ玉藻は生ふる玉藻なす靡き寝し子を深海松の深めて
思へど…
(同 一三五)

…浪のむたか寄りかく寄る玉藻なす靡き我が寝しきたへの妹
が手本を露霜の置きてし来れば…
(同 一三八)

いま一三八歌に注目すれば、「靡き寝」の主語は「我」であるにもかかわらず、叙述の対象として前面に出てくるのは「妹」である。「藻」はどちらかといえば、男性が靡き寝る相手である女性を

導き出すものとして描写されていると考えたい。

次に、前段解釈の揺れの発端である「孀」そのものが男女どちらを指すのかに關しても、稲岡氏に従いたい。氏は、「孀」という字が男女共に用いられていることに注目し、歌の中でその字が男女どちらを指すのか読者に了解させるために「君」「子ら」「妹」等性別の分かる語句を一首中に同時に含んでおり、「孀」の性別を自ずと明らかにしているとする。その例に従い、当該歌でも死者河島を「君」と呼び、「孀」は妃泊瀬部を指すとしている。

また、「孀」の解釈を直接受けるものとして「身に添へ寝ねば」がある。「孀」河島とするa説によるとこの部分の主語は女である泊瀬部ということになるが、「剣刀身に添ふ」の集内での用法は、伊藤博氏^{注3}らが指摘するように、いずれも男性が女性を身に添える意味で用いられている。やはり、男性（河島）が、女性である孀（泊瀬部）を身に添える、というb説が支持されるのである。

大野保氏^{注4}らのc説は、a b説で所有格と見做していた助詞「の」を主格ととることによって前段後半部の内容を泊瀬部中心のものと解する。しかし、宮田持江氏^{注5}によれば、「…の…を…ば」という構文において「…の」の部分は「…ば」に対する主格ではなく、「…を」の部分に対する主格であるとされている。宮田氏にしたがえば、c説のように「の」を主格と見做すことは難しい。

したがって、前段の文脈はb説のように解される。ただし、b説の中でも「夜床」の解釈には揺れがある。西郷信綱『万葉私記』は、この「夜床も荒るらむ」を狭岑島石中死人歌「浪の音のしげき浜辺をしきたへの枕になして荒床に自伏す君が…」（卷二 二二〇）に通ずるものとして捉える。一方、身崎寿氏^{注6}は、居所など生前ゆかりの深かった所の荒廃してゆくのを嘆くのが挽歌の発想の型の一つであることにより、ここを泣血哀慟歌「家に来て我が屋を見れば玉床の外に向きけり妹が木枕（卷二 二二六）」の光景に近いものとして、その意味ではむしろa説のいうような「泊瀬部の閨房」であるとしている。また、駒井陽子氏^{注7}は、記紀万葉の「夜床」が男女共寝の場として歌われていることから、当該歌の「夜床」も「生前の夫婦の床」と解し、身崎氏のように、泊瀬部の荒れた閨房のことが歌われていると結論している。

しかし、これらの解釈を余りに現実の床に拘わり過ぎたものとし、次のような解釈を提示したのが稲岡氏『全注』である。

…「夜床も荒るらむ」と推量し、「けだしくも逢ふやと思」って荒野をさまよう皇女は、河島の墓中を見に行くわけではない。本来自分も共にいるはずの夫婦の夜床を求めつつ、それが求められずに野をさまよう状態と想像するのが、この歌の表現に適したことであると思う。

献呈挽歌の「夜床」には結局何を想定するべきであろうか。「夜床」が前掲した石中死人歌の死体が横たわる光景に通ずる「河島の墓中」だと、「けだしくも逢ふや」という心情及びそれに続く泊瀬部の行動が、感情の高まりを伴い一続きに叙述されることの必然性が薄れるのではないだろうか。後段が「そこ故に」で前段より接続されることを考慮に入れ、この「夜床」は、まず第一に「泊瀬部の側にある床」ということを前提とすべきであろう。それゆえ現実には「泊瀬部の閨房」に近いものであったと思われるが、詩の表現としては『全注』のように「本来自分も共にいるはずの夫婦の夜床」と解釈したい。

ここまでのことを纏めれば、長歌前半は「明日香川の藻は水の流れに乗り、流れ靡いて触れあっている。その藻のように彼方へ此方へ靡き寄り添いあった婦の君泊瀬部皇女を（河島皇子は）身に添えては寝ないので、夫婦二人の夜の床も荒涼としているであらう」と解釈される。次節からはこの解釈をもとに献呈挽歌の抒情について考えることにする。

二

献呈挽歌に関する論の中には、構成や素材に共通点を持つ明日香皇女挽歌とともに論じているものが少なくない。本稿でもその

驥尾に付して、両歌を比較する方法により、それぞれの抒情の特徴を掴みたいと思う。

まず、明日香皇女挽歌の全文を掲載する。①～⑤は、長歌の区切りとなる部分毎に番号を付したものである。

明日香皇女城上殯宮の時、柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌
飛ぶ鳥の明日香の川の 上つ瀬に石橋渡し一云石なみ下つ瀬に
打橋渡す 石橋に生ひ靡ける玉藻もぞ絶ゆれば生ふる 打橋に
生ひをゐれる川藻もぞ枯るれば生ゆる 何しかも我が大君の立
たせば玉藻のころ臥せば川藻の如く 靡かひし宜しき君が朝
宮を忘れ給ふや夕宮を背き給ふや うつそみと思ひし時 春へ
には花折りかざし秋立てば黄葉かざし 敷妙の袖携はり 鏡な
す見れども飽かず 望月のいやめづらしみ思ほしし 君と時々
出でまして遊び給ひし みけむかふ城上の宮を常宮と定め給ひ
て あぢさはふ目言も絶えぬ 然れかも一云そこをしも あや
に悲しみ鶴鳥の片恋婦一云しつ 朝鳥の一云朝露の 通はす君
が 夏草の思ひ萎えて 夕星のか行きかく行き 大船のたゆた
ふ見れば 慰もる心もあらず そこ故にせむすべ知れや 音の
みも名のみも絶えず天地のいや遠長く偲ひゆかむ 御名に掛せ
る明日香川 万世までに はしきやし 我が大君の形見にここ
を

短歌二首

明日香川しがらみ渡し塞かませば 流るる水ものどにかあらまし
 し一云水のよどにかあらまし (同 一九七)

明日香川明日だに見むと思へやも一云思へかも 我が大君の御
 名忘れぬ一云忘れぬ (同 一九八)

(表1)

| 明日香皇女挽歌 | 献呈挽歌 | |
|---------|------------------|-----------|
| ① | 飛ぶ鳥のゝ流れ触らばふ(序段) | 明日香川の景の描写 |
| ②③ | 玉藻なすゝ夜床も荒るらむ(前段) | 死者の生前ゝ薨去 |
| ④ | そこ故に逢はぬ君故(後段) | 配偶者の嘆き |
| ⑤ | 該当なし | 死者への偲び |
| 短歌 | 反歌 | |

これらの段落は献呈挽歌の各々の部分と対応していると思われる(表1)。以下、この区分に基づいて比較検討を試みる。

明日香皇女挽歌①段と献呈挽歌序段に共通して用いられている「明日香川」に関しては、「泊瀬川…挽歌と深い関わりをもつ川」

と比べて相聞的性質の強いものとし、その使用によって挽歌に相聞的背景が形成されていること、また、明日香皇女挽歌の「石橋」「打橋」という語が、集内では多く女のもとに通う男が渡る橋、として用いられていること等が指摘されている。基本的にはこの部分には両歌とも相聞色彩が立ち込めていることは疑いあるまい。

しかしここに描かれている景物「藻」が冒頭に提示するイメージは、両歌で多少違いがあるようだ。「流れ触らばふ」献呈挽歌の藻の描写が、次段とあいまって相聞的な、睦みあう夫婦の様を強調しているのに対し、「絶ゆれば生ふる、枯るれば生ゆる」明日香皇女挽歌のそれは、続く②段で叙述される皇女の薨去を対比する形で「個体の生命力、再生力」を強調している。

明日香皇女挽歌②③段と献呈挽歌前段は先に示したように、生前の回想から死を導き出す場面でもある。明日香皇女挽歌②段では「何しかも…忘れ給ふや、背き給ふや」と、皇女の死に対して、つまり死を一旦受け止めた上で、反語表現による強い感慨が表出されている。また、「目言も絶えぬ」「夜床も荒るらむ」という各々の締め括りの言葉に注意したい。完了型が用いられる明日香皇女挽歌では、死が客観的事態として、推量型が用いられる献呈挽歌では、叙述する主体に話者…の主観的心情として叙述されている

と考えられないだろうか。

両歌に関しては更に、作品中に描かれる配偶者の死の受け止め方に違いが見出せる。前の段落で触れられた「死」を受けた配偶者の嘆きの描写は、明日香皇女挽歌④段、献呈挽歌後段に述べられるが、これらの段落を比較しながら読むと、明日香皇女挽歌の配偶者の気持ち「悲しみ」に対応する献呈挽歌の用語が「慰めかねて」であることがわかる。これらの語義は『時代別国語大辞典』で次のように説明されている。

「悲し」…痛切に心が動かされる。身に染みて感じる。悲しい。

「慰む」…心を休める。気を紛らわす。

集内での用例を検討してみよう。用例は多数に渡るので、主なものを数首挙げることにする。

1…春草の茂く生ひたる霞立ち春日の霧れるもしきの大宮どころ見れば悲しも (巻一 二九)

2…過ぎにし子らと携はり遊びし磯を見れば悲しも

(巻九 一七九六)

3…玉の緒の惜しき盛りに立つ霧の失せぬる如く…玉藻なす靡き

こい臥し逝く水の留めかねつと狂言か人の云ひつる…梓弓つまびく夜音の遠音にも聞けば悲しみにとはたづみ流るる涙留めかねつも (巻十八 四二一四)

4…ここ思へば胸こそ痛きそこ故に心慰ぐやと高田の山にも野にも打ち行きて遊び往けど… (巻八 一六二九)

5…草枕旅の憂へを慰もる心もありやと筑波嶺に登りて見れば… (巻九 一七五七)

6…恋繁み慰めかねて日暮しの鳴く島陰に庵するかも

(巻十五 三六二〇)

用例1をみると引用部分は「荒廃した宮跡・を見れば」「悲しい」という分類が出来、宮跡の荒廃という現状に対して「悲し」という情が表出されていることになる。用例2でも同様に、「死んでしまった子らと遊んだ磯・を見れば」「悲しい」となり、子らが不在の磯であること、すなわちかつて共に遊んだ子らの死という現状に対して「悲し」が表出されているのである。用例3は、「悲し」の後に行動状態の描写が続くという点で形式的に明日香皇女挽歌の用法に近く、「藤原二郎の死・を聞いて」「悲しみ」「止めどもな涙を流す」と分類できる。つまり藤原二郎の死という現状に対して「悲しい」情を抱き、その情ゆえに「にはたづみ流るる涙」を「留めかねつる」ことが叙述されている。しかしこの行動は、「慰む」に後続する行動と比べてみれば違いは更にはつきりするが、少なくともその現状を打破するための行動ではなく、むしろ現実には浸りきる行動であると思われる。このように「悲し」とは、

受け止めた現状を打破しようとはせず、その現状のままに身を置き悲しむ表現なのである。

次に「慰む」を見てみる。用例4では「(妹が恋しく嘆かわしい) そう思うと胸が痛む」「それ故に心が慰まるかと・山野に遊ぶ」となり、「それ」とは、妹恋しさに胸が痛むという現状のままではいられないということである。したがって、「山野に遊ぶ」はその現状を(少なくとも気持ちの上で)打破するための行動である。同様に、5「旅は憂きもの」「それ故に心が慰まるかと・山に登る」では、「山に登る」のは旅は憂きものという現状を打破するための行動である。

6は献呈挽歌と同じ「慰めかねて」が用いられているが、分類すると「(恋しい思いが繁くなっている)心を慰めることが出来ず、島陰に庵する」となり、その経過過程として「庵する」行動は、「慰めることが出来ぬ心」を慰めるためのものと考えることが出来ると思う。「慰めかねて」の場合でも、後に続く行動は「心を慰めることが出来ぬ」、すなわち6でも「恋繁み」という現状のままではいられず、それを打破するための行動と見做すことが可能ではないだろうか。

「慰む」に関して纏めること、この語の前(「心を慰めたい」情の原因に当たる部分)の現状が受け入れ難いがゆえに、それを打

破するための行動が「慰む」に後続する部分で述べられる形になっている。

ひるがえって、「悲し」が用いられる明日香皇女挽歌では、皇女の死という現状に対して「悲しい」情を抱いているわけで、「思い萎えて落ち着かず、ためらい迷っている」は、死という現状を認めた上でその悲しみに浸りきった行動として描かれていることになる。献呈挽歌は「(夜床も荒涼としているであろうという気持ちを)慰めることが出来ぬ」心を慰めることが出来ようと・旅寝をする」と整理でき、『内に表された現状のままではいられず、それを打破するための行動が「旅寝」となる。つまり献呈挽歌の場合には、死という現状を受け入れていない、少なくとも受け入れたくはないことになる。両歌における配偶者の死の受け止め方の差が、この箇所から窺われるだろう。

三

前節に述べたような、二首の配偶者の描き方の相違は、話者(作中)にあつて、その作品を叙述する主体と配偶者の関係の違いによるものではないだろうか。明日香皇女挽歌⑤段では死者への偲びの表明がなされている。③④の相聞的場面からは一変して、ここでの偲びは同じ殯宮挽歌でも公的儀礼的な色の濃い高市皇子挽

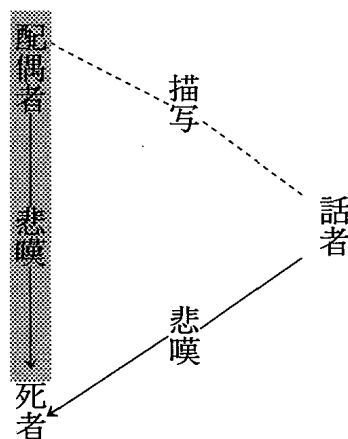
歌の

然れかも 我が大王の万代と 思はしめして作らしし 香具
山の宮 万代に過ぎむと思へや 天の如振り放け見つつかけ
て偲はむ 恐こくありとも
(巻二 一九九)

と類似する、臣下による未来永劫の偲びを詠っているわけである。
献呈挽歌には該当個所がないものであって、臣下的な第三者側か
らの叙述で長歌一首を締め括ることは、当然この作品の詠嘆の方
向に大きく影響する。前段の「見れば、慰もる心もあらず…」に
顕著に現れているように、話者は④段に叙述された配偶者の悲嘆
の様を自らの側に引き取りつつ、次段で偲びを叙述している。こ
の⑤段や第二短歌における「我が大君」という語の使用から分か
るように、明日香皇女挽歌では、作品全体としての最終的な抒情
は配偶者の悲嘆の描写をも包含する、臣下的第三者の立場からの
もので統一されているのである。

また、倉持氏が先掲論文の中で述べているように、形見として
明日香川を採用していることから同様に考えることが可能であ
ろう。「明日香」という名の一致も然ることながら、③④段の配偶
者にとってはむしろ夫婦の思い出の地「城の上」の方が相応しい
筈である。明日香川とは①②⑤段を語る臣下的な話者にとっての
形見の地なのであり、このあたりに明日香皇女挽歌における話者

と配偶者の異質性が示されていると思われる。明日香皇女挽歌で
は、②⑤段に着目すれば、臣下的話者による挽歌的抒情と言わざ
るを得ない。無論、配偶者の描写も重要な要素ではあるけれども、
それは話者の目を通したものであることが明示されているのであ
った。図示すれば次のようになるだろう。



明日香皇女挽歌の話者は配偶者の悲しみを描写し、同情しつつ
もそれとは別の形で自らの抒情を行なう。このように、最終的に
一作品を統一している抒情が「臣下的話者→死者」というもので
あることが分かった。

四

それでは献呈挽歌の話者はどのような存在なのだろうか。諸説
の中では、話者を長歌の中で転換するものと見る橋本達雄^{注10}氏の説
にまず注目されよう。氏は、「身に添へ寝ねば」が敬語表現となっ

ていないことを理由に、前段は河島に敬語を用いる必要のなかった人：そこで浮かび上がってくるのが題詞に出る忍壁：の立場に立って、亡き河島に呼び掛けているとする。一方、後段においても「そこ故に」けだしくも逢ふやと思ひて」「草枕旅寝かもする」に一つも敬語が用いられていないことから、「慰めかねて」「思ひて」「旅寝かもする」は、泊瀬部皇女が第一人称で語っているのだとするのである。

氏は接続詞「そこ故に」の機能に言及し、日並皇子殯宮挽歌に主格交替の例を求めている。

天の下四方の人の 大船の思ひ憑みて 天つ水仰ぎて待つに
いかさまに思ほしめせか つれもなき真弓の岡に 宮柱太敷
き座し 御殿を高しりまして 朝ごとに御言問はさず 日月
の数多くなりぬれ そこ故に 皇子の宮人行方知らずも

(巻二 一六七)

「そこ故に」以前の主格が「天の下四方の人」であるのに対し、結末に至って焦点を絞り「皇子の宮人」を打ち出している。献呈挽歌の「そこ故に」の機能もこれと同様に、主格を転ずる言葉であると考えるのである。

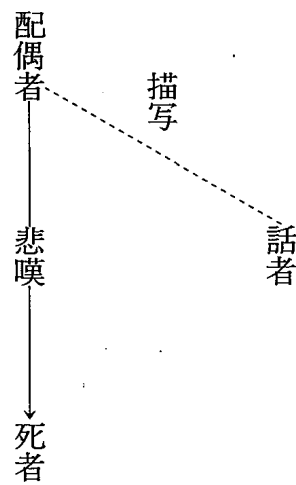
しかし、この説に対する批判は多い。身崎寿氏は、長歌の前半と後半とで話者（橋本氏の用語では「立場」）が変わる形式の作品

は集内に類例がないことも含めて不自然であるという。身崎氏はその上で、前後段通して忍壁から泊瀬部への呼掛けの形式（ただし、後段は忍壁からの呼掛けを受けた泊瀬部の独白・詠嘆と見る余地もあるとされている）であると考え。また、「そこ故に」の機能についても、一六七ではその前後に「主格」の転換を認めることは出来るが、「主格の転換」Ⅱ「主体（叙述する主体、詠歌主体）の転換」とはならない旨の指摘が倉持しのぶ氏^{注12}によっても提出されている。さらに、敬語を使用しない件に関しても、森本健吉氏^{注13}が、身分の差に拘らず、死者に対しては敬避表現を用いるのが集内の用例に照らして自然であるとする。

やはり、献呈挽歌においても、長歌を叙述する話者は一貫して第三者の立場にあると見るべきであろう。ただし、その第三者とは、明日香皇女挽歌のような臣下の第三者ではない。それゆえ話者として題詞に記名されている忍壁を想定することは可能であろう。しかし本稿では、「主体とは特定の個人を指すものであるとは限らない」という品田悦一氏^{注14}の指摘に基づき、話者を特定することとはしないでおきたい。

さて話者は前段では、序段で描写した明日香川の藻のイメージを受けて、靡き寄り添う夫婦の様を描写するが、（河島の死によって）そのようなこともなくなったので共寝の床も荒涼としている

のであらうと推量する。後段ではそれを理由とする形で、河島を求めて越智野をさすらう泊瀬部の姿が描写されるのである。そのような話者と当事者（配偶者）の関係をひとまず図示すれば、次のようにならう。



しかし、明日香皇女挽歌のような独自の抒情部分を持たない話者は、いかにして抒情するのか。そこで注目されるのが、反歌一九五である。

一九五歌は長歌の流れを引き継ぎ、作品の最終的な場面が叙述される部分、ということが出来るが、ここでの話者の立場とは、見てきたような長歌のそれとは多少様相を異にしている感じがする。

皇女に同情し奉ったところもあり、皇女の御気持になって咏んだところもある。

（茂吉『評釈篇』）

表ともとれる叙述が行われているのである。

ここで、長歌叙述の「第三者的立場」と反歌叙述の当事者と思しき立場」という、話者の立場の違いをどう解するかが問題とならう。

倉持氏は、前段を忍壁から泊瀬部への呼掛けとした上で長歌後段に着目し、「玉裳は沾ち」と、美称を用いる部分は未だ第三者による描写であるが、末尾「旅寝かもする逢はぬ君故」に至って、当事者泊瀬部の立場に立った叙述が行われているのだという。すなわち、

逢えないことが次第に強調されていくに従って、詠歌主体も第三者的な視点からの泊瀬部の外面描写だけに留まり得ず、より当事者の内面に肉迫する形で、「逢ふやと思ひて」とその心情を推し量り、やがて「逢う」ことが叶わないことを詠嘆する当事者の嘆きへと変化していく。

と述べ、長歌後段内で漸次話者の立場が移行してゆくとしている。また、品田悦一氏は、^{注16} 第三者の視点と当事者の視点が同一作品内に共存し、叙述の際のそれらの機能（それ以前の部分までの視点を持ち越しながら新たな叙述を行なう）によって、話者は第三者として叙述を行ないながらも泊瀬部の意識を自らの座に手繰り寄せ、その結果長歌末尾以降では、泊瀬部の意識を直に描き出す

ことになるという。そして、長反歌の間の話者の不一致を、反歌に即して、「あらかじめ皇女の立場に立つて叙述したものでなく、叙述の展開に従って皇女の立場へと押し上げられた」ものとしている。

話者の転換と見るか、話者が当事者の意識を描き出していると見るかが両論の分かれ目の一つとなっているが、接続詞による前段（第三者的立場の叙述）と後段（当事者の立場の叙述）の結び付けや、「感情の流れ（『私記』）」のみられる後段の叙述が区切れをもたずに行なわれていることを考慮すると、品田氏のいうような話者の特質があることを認め得るのではないだろうか。話者の立場が変化したように見える当歌の叙述に関しては、話者は第三者の立場にありつつも、感情の流れに従って当事者の立場と思しきものへと押し上げられてゆく、という解釈が適切と考える。

本稿なりに言い直そう。「嬬の命」とあることより、長歌前段で話者は第三者の立場にあることが明らかであるものの、すでに当事者と無関係の第三者ではないのではないだろうか。まず、この段全体としての叙述対象となっているのは、「夜床」である。前述のように「河島の墓中」ではなく「非現実のものでありながらも泊瀬部の側（意識）に属する夜床」と解するとすれば、「夜床」に関する叙述を行っていること自体、当事者の意識を念頭に置いた

叙述であるとはいえないだろうか。

同じことは、本稿の解釈に従うと、この段前半部の「身に添へ寝」の主語（河島）を表わす語の欠落に関してもいえるであろう。前段解釈の混乱を引き起こす省略であるが、このことを裏返していうなら、「身に添へ寝」の主語が河島であることを自明とする省略なのではないだろうか。そして、そうした省略の上での叙述が可能となるのは、話者：叙述する者…と当事者泊瀬部の意識に密接な結びつきがあるためではないだろうか。

話者は確かに第三者の立場にある。しかし前段を客観的事態として描写・推量する話者の意識は、第三者でありつつも、その裏にはすでに当事者の直接的な意識が寄り添っていると思われる。前節で述べた、明日香皇女挽歌③段に比べ、この段の叙述が主観的傾向にあるという見解は、こうしたことと関連付けることが可能ではないだろうか。ともあれこの部分からも話者が当事者泊瀬部との一体化、同化を志向していることが汲み取られよう。^{注17}

長歌後段では、そのような一体化が深化してゆく過程をたどる。「慰めかねて」は、「そこ故に」で前段を受けつつ、そこで第三者が推量していた夜床の荒廃を当事者の側から捉えて発せられているのであろう。

そして、長歌結句「逢はぬ君故」は、当事者泊瀬部の行動に対

する第三者の立場からの意味付けであると同時に、当事者の心情でもあり、感情の高まりに従って「主体（話者）は満たされ得ない渴望を自らのものとして嘆く（前掲品田氏論文）」箇所でもある。皇女の姿を描き出す第三者の眼を保ちつつも、話者は当事者に同化しているといえるであろう。これによって話者から死者への直接的・具体的な抒情が可能になっているのである。この前の部分までが、泊瀬部の意識を話者の側から据え直す形で、間接的に「話者↓死者」という抒情を可能にしていたのだとすれば、最終的な「逢はぬ君故」では、話者が配偶者泊瀬部の意識と同化することによって最も直接的な方向の抒情を作り出しているのだといえようか。

反歌は、以上述べたような長歌の「志向」の行き着くところなのであろう。「敷妙の袖交へし君」は長歌前段を、「越智野過ぎ行く」またも逢はめやも」は後段（長歌では基本的に第三者の目から据えられていたもの）を、それぞれ純粹に当事者自身の意識において捉え直した叙述になっていると推測される。反歌は、長歌を受けつつ、それを深化させ、より当事者に即した形で歌うのである。これらのことから献呈挽歌の話者とその抒情の特徴は、話者が当事者と同化する志向を持つことによって「配偶者↓死者」という抒情が可能になり、それが同時に「話者↓死者」という抒情をも

可能にする、のように結論付けられるのではないだろうか。

五

見てきたように、明日香皇女挽歌では、話者が当事者と一線を画すところにいるため、仮に両者の立場が異なっても、話者は作品全体を通して死を客観的に受容する自身の立場による抒情を貫くことが可能なのである。これに比して献呈挽歌は、叙述において話者と当事者の境を敢えて立てようとせず、話者が配偶者と同化してゆくことになる。それによって、死を主観的に拒否する配偶者の抒情が作品を統一するものとなるのである。

景物をはじめとする様々な類似性が指摘されている明日香皇女挽歌と献呈挽歌も、個々の叙述を突き合わせて見ると、死に対する嘆きの向かう方向の違いが明確に看取されるのである。

注

注1 『詩の発生』西郷信綱氏

注2 「人麻呂の表現意図」（『文学・語学』昭和五十七年六月）

注3 「人麻呂の献呈挽歌」（『万葉集の表現と方法 上』および駒井陽子氏「柿本人麻呂の『献呈挽歌』試論」（奈良女子大学国語国文学研究室『叙説』平成八年十二月）

注4 「婦の命のたたなづく柔肌」（『万葉』昭和三十三年七月）

注5 「万葉集卷二194番歌の一考察」（『高知女子大國文』昭和六〇

年)

注6 「柿本人麻呂献呈挽歌」(『万葉集を学ぶ 二』等)

注7 駒井氏注三論文

注8 倉持しのぶ氏(人麻呂「明日香皇女殯宮挽歌」試論)(北大国語国文学会『国語国文研究 九六』)

注9 身崎寿氏「明日香皇女殯宮挽歌試論」(『文学・語学』昭和五七年六月)

注10 『万葉宮廷歌人の研究』第二章

注11 注六論文および『宮廷挽歌の世界』第四章第一節

注12 「人麻呂『献呈挽歌』試論」(『美夫君志』平成六年十月)

注13 「万葉集挽歌における敬避性」(『国語と国文学』昭和十五年十月)

注14 「人麻呂作品における主体の複眼的性格」(『万葉集研究 一八』)

注十二論文

注十四論文

長歌後段(慰めかねて」と前段にも、そのような関係が成り立っていると思われる。「そこ故に」で接続されることにより、前段で第三者が推量していた夜床の荒廃の事態を当事者の側から据えた結果発せられたものとして叙述されている筈だからである。

(はらだ ようこ 一九九八年日文学卒)